

文秀堂 二百年の物語



自序

二百年の節目に社史をまとめました。拙い文章、興趣に欠ける内容となっているかもしれませんが、ただ、今書き記さないと消えてしまう来歴を残したいと思いました。減衰した水沢筆の歴史、移ろう時代、忘れ去られゆく先祖の物語を現時点で残せるだけのものを後の世代に伝えたいと思いました。

当社は昔日の代表的特産品・水沢筆の製造として創業。隆盛期は岩谷堂を含めて70軒程あった筆屋のなかで唯一存続しました。それは南部鉄器を水沢筆と同列の主力品としたこと。以前は実用事務道具として主力商品であった筆墨硯から、曲折の上現在では事務機販売メンテナンス主力へと変化し得たことによると思っています。

駄文ではありますが、文秀堂・銘光堂・高橋家等に関連した無名の歴史、物語に目を通していただければと思います。

「文秀堂書紀」に多少の推測を加えている以外は、文献や家伝に忠実に記述しました。記述以外のいわれをご存知の方、資料等をお持ちの方は是非お知らせください。





目 次

- 4 頁 年譜・古地図・商訓縁起の書
- 7 頁 奥州高橋氏文 二百年の物語
文秀堂と銘光堂、高橋家と熊田家
1 3 頁 参考文献、参考資料
- 2 1 頁 文秀堂書紀・五代目倍吉 ある日の独り言
- 2 8 頁 伝聞見聞録
 - 2 8 頁 高橋長吉 銘光堂外伝
 - 3 0 頁 水沢筆製造終幕・分業による工芸品生産
 - 3 1 頁 高橋家 家族書
 - 3 2 頁 忘れられぬ激動の一年・平成二十三年
- 3 4 頁 福島いわきと岩谷堂を繋ぐ縁し
 - 3 4 頁 岩城参議院議員(法務大臣)事務所訪問
 - 3 5 頁 いわき紀行・高橋家の出自は？
- 3 7 頁 営業案内・会社概要
- 4 3 頁 The story of 200 years. Bunshudo and Meikodo, The Takahashis and The Kumadas.
- 4 7 頁 雑誌・新聞・テレビ資料

年 譜

慶長 19 年 1614

豊臣家祐筆和久氏が伊達家預人となり仙台に製筆を伝える
暫後 伊達一門留守家・岩城家が家臣に製筆の内職を奨励

文秀堂元年(文化 14 年 1817)

東京商工リサーチ資料による創業年

留守家(水沢伊達家)家臣熊田惣吉 製筆を内職とする
岩城家(岩谷堂伊達家)家臣高橋家 相前後し製筆を行う

文秀堂 37 年(嘉永 6 年 1853)

帝国データバンク資料による創業年

此頃 高橋家 仙台玉光軒、銘華堂と連携し製筆業を本格化

文秀堂 72 年(明治 21 年 1888)

高橋長吉 職人 4 名を雇い工場を開き筆製造卸を生業とする

文秀堂 79 年(明治 28 年 1895)

文秀堂筆 内国勸業博覧会で彰仁親王より褒状を受ける

文秀堂 107 年(大正 12 年 1923)

高橋倍吉 水沢移住 熊田文秀堂と高橋銘光堂経営統合

文秀堂 112 年(昭和 3 年 1928)

昭和天皇御大典(即位の礼・大嘗祭)記念湯釜を文秀堂銘で作成

文秀堂 134 年(昭和 25 年 1950)

法人に改組し有限会社高橋文秀堂とする

文秀堂 137 年(昭和 28 年 1953)

自宅社屋全焼

文秀堂 142 年(昭和 33 年 1958)

文秀堂南部鉄瓶 北日本産業共進会で努力賞を受賞

文秀堂 153 年(昭和 44 年 1969)

株式会社に改組し文秀堂株式会社とする

文秀堂 159 年(昭和 50 年 1975)

北日本商事株式会社設立

文秀堂 161 年(昭和 52 年 1977)

キャノン製品正規販売・認定保守サービス業務受託店

文秀堂 188 年(平成 16 年 2004)

コニカミノルタ事務情報機器販売店・認定サービス実施店

文秀堂 195 年(平成 23 年 2011)

創業 195 年行事開催 直後に東日本大震災発生
平泉世界遺産登録

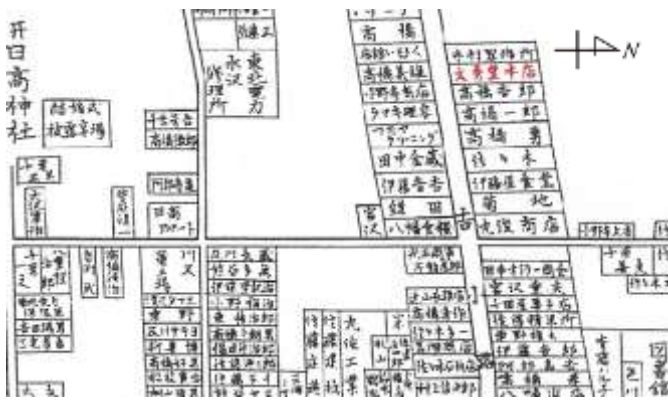
文秀堂 200 年(平成 28 年 2016)



上
明治三十五年八月
名所繪入水澤全圖原貌

左
昭和三十年前後
文秀堂本店 付近地図
(右下有藤春子首相夫人宅・新平宅は更に東)

下
昭和三十年前後
文秀堂支店 付近地図



文秀堂所蔵品
商訓縁起の書

後藤新平 関東大震災帝都復興院総裁・東京市長・逓信相・外相
内相・台湾総督府民生長官 水沢・吉小路出身 一八五七～一九二九

(厳冬の後) 一気に春の暖かい風と温かい水がやって来る。
|| (厳しい試練があつてもその後)
一気に良い時代になり素晴らしいことになる。
白居易 通称 白樂天 「府西池」の結句



大正癸丑(大正二年) 春日
行書体
草書体
春風春水一時来
(後藤)新平



永昌=永遠の繁昌 庚午冬=昭和五年冬 泉水=齋藤實
齋藤實 第三十代総理大臣 水沢・吉小路出身 1958～1936

奥州高橋氏文 二百年の物語
文秀堂と銘光堂、高橋家と熊田家

二つののれんと二つの家の二百年



1 江戸時代後期、筆製造創業期

今から400年程前に豊臣家より伊達本家に伝えられた筆造りは、その50年ほど後に本家より留守家（水沢伊達家）へと伝えられました。水沢一万六千石（現在の岩手県奥州市水沢区）を治めていた伊達一門十一家のひとつ留守家は、家臣に筆造りの内職を奨励しました。

江戸時代、留守家家臣熊田家は筆造りの内職をしていました。家伝により創業は水沢領内の陸奥国塩竈村虚空蔵小路にて文化14年（1817年）と伝わっています。家伝と東京商工リサーチ資料は一致しています。同時期に岩谷堂五千石（奥州市江刺区）を治めていた伊達一門十一家岩城家（岩谷堂伊達家）家臣も筆造りの内職をしていました。

2 幕末、文秀堂・銘光堂黎明期

文化年間、岩城家家臣高橋長治郎は岩谷堂にて製筆をしていたようです。その時期が1817年より前か後かは資料にも口伝にもありません。高橋家は長治郎から孫の宮三郎へ、宮三郎から甥の長吉へと引き継がれました。長吉は仙台玉光軒と銘華堂にて製筆の指導を受けています。

その後、高橋家は長吉の修行先二軒の屋号から[銘][光]の一字ずつ取り銘光堂を商号としました。一方熊田家は文秀堂を商号としました。

帝国データバンク資料には、文秀堂の創業が嘉永6年（1853年）とあります。前述の文化14年という家伝と合致しません。熊田家が商号文秀堂を使い始めた年かもしれません。

		水沢 文秀堂	岩谷堂 銘光堂
江戸時代	文化	熊田家	高橋家
	文政	惣吉	長治郎
	天保		
	弘化		
	嘉永	清治	宮三郎
	安政		
	万延		
	文久	常之進	長吉 (長吾)
	元治		
慶応			
明治			
大正		豊	倍吉
		倍吉	養吉
昭和			
		吉郎	
平成		竜太郎	
		健太郎	
		太智	

3 明治維新から明治後期 筆隆盛期から衰退始期

江戸末期から明治初期には、常之進の熊田文秀堂と長吉の高橋銘光堂の他にも多くの筆製造業者、製造卸業者があり、水沢を中心とした地域で筆造りが盛んに行われていました。

筆製造業者は水沢には55戸、岩谷堂には数戸あり、職人を使役し卸小売を行う問屋は10戸程でした。

高橋銘光堂は町屋敷の仲町74(現中町5)に移転し、その後職人4人を抱え工場を構えました。江戸時代、水沢と岩谷堂の筆は地元周辺と南部領を主な市場としていましたが、この頃になると水沢以北の本州と開発の進む北海道樺太まで営業範囲を拡大し全盛期となりました。

明治期、熊田家の常之進と豊は水沢町会議員を務めていました。この時期、維新後開業した筆製造業者の淘汰が進んだ一方、幾人もの職人を使役する規模の業者が増えてきました。

製造卸も減少し始めた明治後期に、熊田文秀堂と高橋銘光堂は実質的に統合したと思われます。大正に入り倍吉は、高橋銘光堂を弟養吉に任せ、水沢に移り住み、文秀堂四代豊と共同で経営にあたりました。

4 大正期 同じ地元の鉄器 新たな柱への取組始まる

筆製造業者の数はさらに減少



文秀堂筆工場 水沢虚空蔵小路
明治～大正期稼動



明治二十八年 筆出品
勸業博覧会賞状 総裁彰仁親王



昭和三十三年 鉄瓶出品
北日本産業共進会 総裁青森県知事

し、水沢町内では筆製造12戸、製造卸は文秀堂他1戸、岩谷堂には筆商が銘銚堂他1戸となりました。熊田家は経営から離れ、倍吉が文秀堂五代となりました。

文秀堂は筆等の販売するかたわら、同じく地元の特産品であった鉄器も併せて販売しました。その頃は主に鉄瓶等の日用品と鉄砲と呼ばれた風呂の焚き口でした。

5 戦後、新たな主力へ移行始まる 鉄器・漆器と事務機メンテナンス

第二次世界大戦前、民芸＝民衆的工芸という造語とともに伝統的な工芸品が再評価されました。戦後、岩手県産工芸品は日用品贈答品や観光地の土産品としての需要が増えました。この頃秀衡塗の企画販売を行い、南部鉄器と並ぶ工芸品主力商品としました。

鉄器や漆器等の主力工芸品に関しては、職人と連携し、企画段階から携わり自社ブランドで生産販売し、文秀堂の中心的商品と位置づけました。代表例として、文秀堂と岩手県工業試験場、正法寺、卓越技能士の四者による正法寺椀の復元が挙げられます。

この頃、今迄主力であった筆や刷毛・硯・墨の需要はさらに少なくなり、文具事務用品と電卓へ、そして更にオフィス家具、事務機械販売メンテナンスへと変わりました。

同じ地場産品として一緒に扱っていた筆と鉄器の販売が、事務機械事務用品の部門と工芸品の部門に、分かれて販売されるようになりました。同じ頃、土産食品の販売の子会社北日本商事を設立し麺、漬物、煎餅等の県産食品の販売を始めました。

6 平成期、現在

そして現在、工芸品販売部門は、南部鉄器を主力とした工芸品の販売に加えて、関東東北地区内の工芸品販売先の観光施設を中心に



文秀堂 家紋入 銘入 鉄瓶



岩谷堂商工会加盟店録



昭和35年文具店店頭

家具寝具や食器厨房用品、風呂用ソープ等の業務用品を併せて販売しています。

事務機部門は、OA情報機器の販売メンテナンスを主力に、事務用品や事務用業務用家具を扱っています。七代目がキヤノンに勤務していたのに続いて八代目がコニカミノルタに勤務し、メーカーとの連携がより強固になりました。

小売店舗は工芸品贈答品の吉小路店クラフト館、文具事務用品の吉小路店文具館と観光物産品を中心としたZプラザ店の2店舗3部門があります。

今では全く異なる取扱品である工芸品、事務機の二つの部門は、既述のように元々は地場産品という共通点があります。

筆の実用事務用品としての役目は終わってしまいました。昭和期後半には筆需要の減少により、文秀堂ブランド筆の地元水沢での生産が終了しました。そして、平成初期に水沢筆の最後の職人が亡くなり、水沢と岩谷堂での筆造りの歴史が完全に終焉を迎えました。

但し、広島県の筆職人と連携して委託生産することにより、最後の水沢筆である文秀堂印の筆を現在も販売しています。

筆を祖としているのは事務機械事務用品部門です。しかし筆は実用的な事務用品文房具というより、書道の道具、伝統的な工芸品のひとつという色合いが強くなり、現在その販売は工芸品販売部門が行っています。

7 二百年間の試練

創業195年である平成23年3月11日午後2時46分。この時からしばらくは試練の日々でした。東日本大震災とその津波により、主力販売先である三陸海岸の観光関連施設と福島で大きな影響が出ました。約50軒の得意先が津波で流されました。8軒で亡くなられた方がいました。全てのものが止まってしまいました。売上が直後数ヶ月は前年対比30%から80%減少しました。津波被害による破綻や長期休業も続出し売掛金回収もままなりませんでした。



文秀堂
秀衛塗カタログ



文秀堂
南部鉄器カタログ



この二百年の間に、存亡の危機は何度かありました。家禄引換公債証書発行条例により筆のみで生計を立てなくてはならなくなった明治初期。筆業者の大半が廃業破綻した大正期。自宅と会社が火事で全焼した第二次世界大戦直後。バブル崩壊時期。そして東日本大震災。そのつど乗り越えてきました。

筆の全盛期は残念ながら過ぎてしまいましたが、筆はこれからも日本で愛され使われ続けていくはずです。

日本文化にしっかり根付いている筆、地元岩手製造という強みがある南部鉄器秀衡塗等の伝統工芸品、メンテナンス等の地元対応能力が求められる事務機械や事務用品。取扱品は創業以来少しずつ変化しつつも基本や根本は変わっていません。

「地元のもの外で売れ、外のを地元で売れ」という言葉が高橋家に伝えられています。南部鉄器や秀衡塗等の地元工芸品を県外海外へ、県外海外で生産された情報機器事務用機器を地元で売ることで、今でもその言葉に答えています。

8 震災と平泉世界遺産 次の百年へ、次の・・・

震災の後、事業継続が危ぶまれる時期が数ヶ月続きました。その中で継続できた理由のひとつは平泉の世界遺産登録でした。

しかし、厳しい経営環境は現在も続いています。厳冬後に春が来る「春風春水一時来」までもう少しと思っています。

本年、皆様のご支援のもとにどうにか無事二百年を迎えられました。しかし季節は廻り冬になるように、また厳しい時期が来ると思われます。それを乗り越え永遠の繁昌「永昌」となれるよう、変化し継続していきたいと思っています。

次の世代に繋ぎ、次の百年へ、



版画本おくのほそ道
全4巻



正法寺認定正法寺椀



高橋銘光堂工場跡地(明治期)
片岡村仲町74(現在の江刺区中町5)



参考文献・参考資料



水沢町史 1931年発刊



水沢市史 1985年発刊

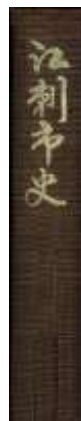


水沢市史
昭和五十一年十一月十七日発行

編集 水沢市史編纂委員会
発行 水沢市史刊行会
印刷 水沢印刷株式会社



江刺郡志 1925年発刊



江刺市史 1975年発刊

江刺市史
昭和五十年八月十日発行

編集者 江刺市史編纂委員会
監修 森 嘉兵衛
発行者 江刺市
印刷所 株式会社熊谷印刷
〒950-01 江刺市上田一丁目六―四九
電話 帯四一五(一六)



えさしの歴史 1985年発刊

えさしの歴史
平成十年一月十一日印刷
平成十年一月十八日発行

編集者 江刺市史編纂委員会
江刺市公共堂字杉の町四一
発行者 江刺市
江刺市大通り一八
TEL. 〇二九七二五(一)一
印刷所 川口印刷工業株式会社
盛岡市刺場十一一
TEL. 〇二九一六(一)二二



明治十九年十一月十三日岩室町仲町
 高橋長吾殿の長男として生れ幼少
 て御尊文の下にて製筆業筆十五歳の
 時水澤町熊田文秀室に奉公せられ其
 間四代熊田豊氏と相提携し水澤筆
 り製造販賣に惠念く更に羽田名産、南
 部鐵瓶に當地特産の鐵器鑄造等廣
 く北海道は素より東北、関東、關西、及
 び輸出事業は多大の功績を挙げられ今
 日、基礎をきつられまゝに

江睦會會長 依田榮吉

江睦会(こうぼくかい)資料(昭和35年)
 (江刺より水沢へ移住した商人の親睦会)

有限會社 高橋文秀堂
 岩手縣水澤町久田二〇
 電話 水澤 六二
 振替 盛岡 四九九
 取引銀行 岩手殖産水澤支店
 興産相互水澤支店



水沢くくり雛 商売繁盛縁起額
 (江戸中期から昭和初期)





業歴の長い県内企業上位30社

順位	商号	所在地	創業年	業種
1	新屋社温泉	北上市	1134	旅館、ホテル
2	南阿部鉄元祖鈴木主善堂	盛岡市	1599	鉄鉄鋼物製造業
3	森ホテル大塚	盛岡市	1615	旅館、ホテル
3	涌川高原温泉街	一関市	1615	旅館、ホテル
3	こざ九・森九商店	盛岡市	1615	洗剤製造業
6	菱の司酒造所	盛岡市	1624	清酒製造業
7	森木洋器本店	盛岡市	1644	事務用機械器具卸売業
8	櫻清倉庫	盛岡市	1673	倉庫業
9	森千葉新商店	一関市	1704	家具小売業
10	花玉川屋	花巻市	1716	生菓子製造業
10	旗ゆきや	盛岡市	1716	生菓子製造業
12	上戸工業	二戸市	1736	その他小売業
13	松川温泉街	八幡平市	1743	旅館、ホテル
14	廣平金商店	盛岡市	1767	その他小売業
15	森相川屋	一関市	1783	呉服・靴小売業
16	森森八商店	盛岡市	1789	金物小売業
16	森佐々長商店	盛岡市	1789	その他小売業
16	上関伊酒造所	雄勝町	1789	清酒製造業
16	森小鏡太	花巻市	1789	オフセット印刷業
20	森高商店	奥州市	1797	野菜漬物製造業
21	森小田島	花巻市	1804	医薬品卸売業
22	森小田島薬局	花巻市	1807	調剤薬局
23	森八木洋商店	一関市	1807	しょう油、食用アミノ酸製造業
24	森山清商店	盛岡市	1813	その他小売業
25	文秀堂	奥州市	1817	紙・文具小売業
26	森わしの尾	八幡平市	1829	清酒製造業
27	森宮澤商店	花巻市	1830	ガソリンスタンド
28	森小清呉服店	北上市	1839	呉服・服地小売業
29	森佐々木組	一関市	1842	建築工事業
30	(資)大黒堂商店	奥州市	1844	洋品雑貨、小物小売業

東京商工リサーチ(胆江日日新聞)

イーハトーブを追って

岩手県の百年企業

岩手県老舗企業年譜

安土・桃山時代

1601年 慶長6年 ホテル大観

江戸時代

1616年 元和2年 南部鉄飯元祖鈴木主善堂

1626年 寛永3年 小野染彩所

1638年 寛永15年 木津屋本店

1723年 享保8年 旗新

1783年 天明3年 相川屋

1830年 天保1年 赤沼商店 官澤商店

1834年 天保5年 和泉屋本店

1842年 天保13年 佐々木組

1848年 嘉永1年 及富

1850年 嘉永3年 鈴木轟機

1852年 嘉永5年 水田清造所 及源清造 釜屋酒造店

1853年 嘉永6年 文秀堂

1854年 安政1年 泉金酒造

1857年 安政4年 村澤

1861年 文久1年 高橋屋

1862年 文久2年 鈴蘭酒造

1863年 文久3年 佐々長商店

1865年 慶応1年 ふるかわ呉服店

1866年 慶応2年 丸乙呉服店 川徳

1867年 慶応3年 大助屋家具 江戸屋染染店

帝国データバンク



明治時代 文秀堂 北海道地区お得意様の名簿





昭和天皇御大典湯釜
昭和三年 即位の礼・大嘗祭
文秀堂銘作成(逸失品画像のみ)



文秀堂筆 商品名



巻物 岩谷堂羊羹 伝説義経の北行





江戸後期～明治初期 藤田萬藏孝保 作
鶴紋南部型本砂鉄鉄瓶 亀紋富士型本砂鉄鉄瓶



民芸シリーズ切手第一号
鉄瓶 藤田萬藏孝保 作



昭和四十五年
昭和天皇岩手行幸時
昼食用秀衡塗卓上膳



文献資料所蔵先

帝国データバンク
東京商工リサーチ
胆江日日新聞社
岩手日報社
岩手日日新聞社
中日新聞社
静岡新聞社
NHK
奥州市立水沢図書館
奥州市立江刺図書館
奥州商工会議所
マガジンハウスBRUTUS編集部
文秀堂株式会社
高橋家

取材訪問先

岩城光英参議院議員事務所
いわき市教育委員会文化課
奥州市江刺総合支所
えさし郷土文化館
齋藤実記念館
後藤新平記念館
白水阿弥陀堂
正法寺
光明寺
荻田耕造氏



高橋文秀堂本社入口前・昭和三十年代末頃
竜太郎・晶子(姉)・菜穂子(妹)

文秀堂書紀

五代目倍吉 ある日の独り言



大正十二年(1923) 関東大震災発生年のある日
岩谷堂筆の晩期

昭和五年(1930) 世界恐慌・昭和恐慌真っ只中のある日
高橋長吉の晩期

昭和三十四年(1959) 社屋家屋全焼数年後のある日
高橋倍吉の晩期

大正十二年(1923) 関東大震災発生年のある日
岩谷堂筆の晩期

父長吉(長吾)は寂しそうに岩谷堂仲町の高橋銘光堂の筆工場の隅に黙って座っている。

母のハツが数年前に亡くなった。本年筆の製造を止め、もうすぐ私は水沢に移住する。私が若い頃に修業した水沢の熊田文秀堂と経営を統合するためである。私が文秀堂に入社して弟の養吉が銘光堂を継承する。のれんは守れるが、筆は文秀堂からの仕入となる。

父は妻子が眠る光明寺の高橋家の墓から離れ難く岩谷堂に残る。光明寺は主家岩城家とその家臣の菩提寺である。

先日関東大震災が起こり、多くの人が亡くなり関東圏の経済は混乱している。一次大戦後の恐慌もある。大正の今、水沢筆の製造卸は転換期に来ている。そう考え合併を決めた。

高橋家は藩政時代より内職として筆造りをしていた。父は明治九年に家禄引換公債証書発行条例により家禄が失われると、筆製造卸小売商となり銘光堂というのれんを掲げた。父はなかなか商才があったようだ。自分が守ってきたのれんに人一倍愛着があるのも当然だと思ふ。

銘光堂の屋号は残るとはいえが文秀堂の子会社になるような形での統合と筆製造効率化に賛成してくれた。今は隠居の身とはいえ父には感謝している。



岩城家墓所 光明寺



高橋家 旧墓所 光明寺



光明寺の墓石。「安政六末年」
「高橋長治郎」と刻まれている。

関ヶ原以降の水沢と岩谷堂の筆造りは武士の内職であった。岩城家の書記職である祐筆や物書を勤める家には高橋姓が多く、筆と縁のある一族であった。天明の大飢饉(1782~8)や上米により侍土産を減じたため、縁ある筆造りの内職を始めたと伝わっている。維新後も水沢と岩谷堂では、内職に引き続き筆の製造卸にかかわった武家が数多くいた。高橋家も熊田家も同様であった。家禄を失った全国の武家の相当数は、一時金を元手に商売を始めた。明治期には筆屋を含め各地で廃業が相次いだ。その要因のひとつは武家の商法であったことだと思う。

今回の決断は、鉄道の駅が水沢になってしまった事も一因である。水沢岩谷堂筆の主要消費地である東北・北海道・樺太への出荷や、原材料の仕入等の流通は、鉄道によるものが今は主である。岩谷堂の工場から水沢の駅までは、北上川を越えて2時間以上かかる。出荷入荷作業をして往復すると一日仕事になる。水沢の筆屋には地の利がある。鉄道開通以前、流通は舟運が主力であった。北上川舟運は東岸、つまり岩谷堂側が栄えていた。岩谷堂に馬市があったこと、北上川東岸がその立地により東海(太平洋)の海産物の流通拠点であったこと等により、水沢よりも岩谷堂のほうが活気があったとも言える。父も岩谷堂に駅があったら街の衰退もなく、銘光堂も単独で継続できたのにとこの思いだろう。

祖母は高橋家から大和田家に嫁ぎ父長吉を生んだ。磐城平岩城家から伊達家に嫁いだ久保姫の長男が、母の実家岩城家の跡継ぎとなったのと同様に、長吉は母の実家に戻り、伯父高橋宮三郎の後継となった。

熊田文秀堂は、水沢一番の筆屋の本店である。商才もあり、明治大正



国宝 白水阿弥陀堂(いわき市・金色堂を模したといわれる)
岩城家祖則道の正室 奥州藤原氏初代清衡の娘徳姫 建立

期、親子とも町議会議員を務めた名士である。主家の留守家は伊達本家との血筋も近く、伊達姓を許されていた。一門十一家の中でも禄が高い。それに陸奥国留守職を務めた京都出身の名門である。

高橋家の主家は石高が五千石と留守家より少ないが、平安時代よりの由緒ある岩谷堂伊達家・岩城家である。筆造りを始めたのは、岩谷堂伊達家八代岩城義隆公の時代である。

岩城家は安土桃山時代、磐城平(いわきたいら・現在の福島県いわき市辺)十八万石を治めていた大名であった。小田原征伐直後、当主常隆病没時に長子政隆幼少のため、秀吉の意向もあり佐竹家よりの養子後継となった。常隆の実子政隆は当主になれず、流浪の後に伊達家家臣になり岩谷堂領主になった。本来は嫡流であった岩城氏が岩谷堂の領主となったことは、平安時代に岩城家の祖である則道の正室が、岩谷堂の出である奥州藤原氏初代清衡の娘徳姫であったことを考えると運命的なことである。徳姫が夫の菩提を弔うため、金色堂を模して建立した白水阿弥陀堂(国宝)のそばには、高橋と言う地名がいくつかある。

江戸時代後期、出羽亀田藩藩主となっていた岩城家本家が断絶した。断絶した本家の血筋は、本来は佐竹家よりの傍系である。そして本来嫡流である岩谷堂の岩城家が亀田藩藩主となった。そして残された岩谷堂岩城家の分家筋が岩谷堂の当主となった。

岩城家と留守家の財政逼迫の中で、高橋家も熊田家も家禄だけでは家を維持できず、内職を余儀なくされていた。父から聞いた話では、両主家共に名門であり元は大名だったため、陪臣の身ながら家臣の数が多く



白水阿弥陀堂を取り囲む浄土庭園
毛越寺庭園を彷彿とする

大変だったという。上米も理由の一つだろうが、家臣一人当たりの禄が元々少なく、生活の糧の一部を内職に頼らざるを得なかったようだ。

昭和五年(1930) 世界恐慌・昭和恐慌真っ只中のある日 高橋長吉の晩期

今日、父長吉が亡くなった。水沢移住後、元留守家家臣高橋長蔵の子に同姓同名の者がおり、長吉から長吾に改名した。

世はまさに世界恐慌、昭和金融恐慌、昭和農業恐慌の真っ只中である。日本中世界中大不況である。銀行が再編される大変な時代。関東大震災以来、経済はどんどん深刻な状況になり、文秀堂も例外ではない。岩手県内では、特に農村の状況が厳しい。

熊田文秀堂との合併後、筆屋はどんどん少なくなった。最盛期には水沢岩谷堂あわせて七十軒ほどあったが、昭和五年の現在は数えるほどになってしまった。熊田家と合併したのは正しい判断であった。大正期に鉛筆やインクつけペンが普及し、筆の需要は減少しつつある。その中で筆同様地場の産品である南部鉄器を主力扱品のひとつとしたことも、生き残れた要因の一つだろう。暫らく前に、熊田家は文秀堂の経営から手を引いた。文秀堂の屋号を引継ぎ私が経営することとなった。

私は「高倍、高倍、倍倍儲ける」と陰で言われているようだが、倍はともかく、正直に地道な商で文秀堂を維持してきたつもりだ。

私は筆が取り持つ縁により、元留守家書記職・祐筆の小島家から妻を



昭和17年2月新嘉坡(シンガポール)陥落
文秀堂本社前路上にて 倍吉(中央・賞状)

迎えた。小島家は高野長英の家とも縁がある。高橋家親族は留守家家臣の家との婚姻が少なくない。これは、伊達政宗の祖母が磐城平岩城家の久保姫であったことと関係があるのだろう。久保姫は実家より供を連れて輿入れした。伊達宗家、留守家、岩城家当主になる男子を産んだ。久保姫亡き後、実家である磐城平岩城家よりの供の者は留守家の家臣となった場合が少なくなかった。岩城家家臣と留守家家臣には元々同じ岩城家家臣としての強い親近感がある。

妻トヨノとの間に二十数年の間に八人の子宝に恵まれた。父の臨終に際し私には心残りがある。八人が皆女子で未だに男子の孫を父に見せてやれなかったことだ。

今、妻は九人目を身ごもっている。まもなく臨月である。もしこの子が待望の男子なら一目見せてやりたかった。それ迄もう少しだけ頑張っ

昭和三十四年(1959) 社屋家屋全焼数年後のある日
高橋倍吉の晩期

私はもう長くない。まさに晩年。寝たきりになってしまった。筆屋は文秀堂1軒なつて久しい。屋号は熊田文秀堂から高橋文秀堂とした。

数年前、社屋家屋は火災により全焼し、その後厳しい中から文秀堂は立ち直ってきた。戦前の万年筆、戦後急速に普及したボールペンが影響し、筆の産地は広島熊野他数少なくなった。

<p>倍吉さん方 全焼</p> <p>水澤町の火事 十日午前一時二十五分頃水澤町久田七郎製紙工場高橋倍吉さん(六六六)方から爆発し、水澤町高橋倍吉さん(五九七)合はじめ物置、製紙中の車れ庫(一)十坪を全焼し、さらに隣接高橋倍吉さん宅裏に燃や移つたが、即つけ火を消滅させた。らび各消防団員は消火に午時一時十五分頃火したが同家トヨノさん(六三三)は避難し、一週間の火傷を治つた。損害原因については目下水澤署で取調中。</p>	<p>出火御見舞御禮</p> <p>十日午前一時三十分頃出火の際に早速御座付消火に御座力下され且御丁取なる御見舞を感有難うございました。混雑中の事として御座名お伺い洩れもあることと、存じ賠償乍ら紙上を以つて厚く御礼申上げます。</p> <p>二月十一日 水澤町久田二〇 高橋倍吉 有限 高橋文秀堂 會社</p>
<p>水澤地區署で傍證固め 火災は失火と断定 取灰がカンナ屑に引火か</p> <p>去る十日水沢町久田高橋倍吉さん方から出火した原因につき水沢地区署では何しろ火の氣のない物置からの発火で一時は放火の疑をあげ捜査を進めていたが、同署では工事中の關係大工さん(家族)から當日の事情を聴取調査を進めた結果九分九厘失</p> <p>火と断定した模様で傍から燃えたのではない、證固めに調査を進めてかと思はれる。また同火災の発生時間(一九)は大工の弟子少年(一八)がロソクの灰を新築際附近に捨てたのを、その灰がカンナ屑に引火したと断定するに、新築の際を調べて外儲る。</p>	

昭和28年2月10日
文秀堂家屋社屋全焼

経済成長期の今、私には後継者がいる。父の臨終に間に合わなかった九人目が長男、十人目が次男と共に男子であった。

文秀堂は筆・硯・墨・算盤を主力とした明治大正期とは様変わりした。筆等主力の部門の取扱品は、事務用品や今話題の電卓などの事務機械へと変化しつつある。また最近工芸品・民芸品という言葉が巷で流行り、その需要が増え始めている。その時流に乗り、南部鉄器に加えて秀衡塗等の漆器や陶器類の扱いを考えているようだ。水沢筆の歴史も私と共に終わるのかもしれない。

父と先祖に申し訳なく思っていることがある。高橋家の墓を岩谷堂光明寺から水沢大林寺に移したことだ。昭和初期恐慌時代以降、父に続き四人の娘を亡くした。遠隔のため岩谷堂の光明寺への墓参がままならないうでいた。そこで留守家ゆかりの大林寺が墓所を移転整備するのを機会に、留守家にゆかりがある家に嫁いだ娘たちの家と並んだ墓を作ることにした。

近年、長男に前沢の佐々木千代治氏の孫娘を嫁に迎えた。佐々木家は伊達一門三沢家三千石の家臣の家柄で、千代治氏は前沢上野原開拓の父と言われ、堰や堤にその名を残す前沢有数の名士である。

その長男夫婦に四キロ近い男子が生まれた。父長吉はあと少しのところで男子の孫が見られなかった。私はぎりぎり間に合った。うれしさを感じる分だけ、父には本当に申し訳なかったと思っている。ただ、孫の記憶に残る思い出を作る時間はなさそうだ。(翌年一月倍吉没)



晩年の倍吉
妻トヨノ(豊乃)と共に

高橋長吉 銘光堂外伝

仙台での修行は生産調整

文秀堂と銘光堂の歴史を調べる中で、ある筆製造業者の一文に出会った。「藩政時代、地元近隣に大きな消費地が無い生産地の場合、需給のバランスが崩れた時に、それを解消するため、遠隔の大消費地かつ生産先進地へ製造者が修業に行くという形で生産調整が行われた。」という趣旨の記述を見つけたのだ。これが事実なら生産調整以外にも利点がある。大消費地での生産人手不足解消と同時に、先進地での修行による製造技術の吸収の機会であることだ。地元や近隣に大きな消費地をもたない産地は、生産者の数が増えると需要と供給のバランスが崩れる。江戸期以前は、現在のように限られた産地の筆が全国に流通することはなく、全国各地に筆の産地があり、その周辺の需要にできていたと思われる。

なぜ生産者が増えたのか。筆製造が始まり定着する。長い間に技や知識が蓄積され、産地が形成され始める。この地の筆は主家推奨の家臣の内職である。親方となる家臣が子方を使役し技術を伝える。子方はいずれ独り立ちし、一人前になれば元の子方は親方になる。増えた親方はそれぞれ子方を持つ。その子方も独り立ちし……。製造者は増加し盛んになる。商圈需要規模まで順調に拡大する。これが続くと供給過多に陥る。

江戸末期の水沢と岩谷堂では、内職を求める武家が増えた。内職として筆製造を選択する武家が、需要に対し多すぎたのではないか。如何せん地元近隣の需要は限られている。内職者が少ないうちは良いが、増えてくると余剰が生じ収入が減る。

するとどうするのか。せつかく身につけた技術は活かしたいし続けたい。ならば需要のある所へ筆を売り込めるのかといえ、それは易しくない。江戸時代という流通が限られていた時代に、需要の少ない産地において供給過剰の生産者の取れる道は何だったのか。そのひとつが修業という名目で、その産業の大消費地で先進地にある同業者に、職と収入を求めることだったようだ。いわば出稼ぎである。そこに職人の不足があればさらに好都合である。

その後、修業という名の出稼ぎをした者は、先進地で腕を磨いて戻ってくる。それが地元産地の技術向上になる。また修業を通じ、大消費地との確かな繋がり、計らずも流通が良くなると販路として活用できるようになったと考えられる。

修行経験を活かして存続

長吉はなぜ仙台に修行に行ったのか。仙台は江戸時代初頭に、豊臣家から筆造りが伝わった先進地であるが、当時水沢岩谷堂の筆造りも15

0年ほどの長い歴史を持ち、ある程度の隆盛を迎えていた。今更仙台まで修行に行く必要は無かったと思われる。つまり前述の通り生産調整のための出稼ぎ修業だとも考えられる。年若い長吉はすでに父祖より筆造りを学び、出稼ぎできる程度の技術を身につけていたはずである。高橋銘光堂の創業の時期は、長吉が仙台で修行したと伝わる安政年間より遡る。長治郎死亡と前後して長吉は仙台より戻っている。長吉以前の製筆について資料は乏しく口伝は曖昧であるが、初代は長治郎、創業は熊田家と同じ文化年間頃との口伝との整合性もある。また、上米と飢饉があり、内職に頼らざるを得ない経済状態になっていた時期であったことから信憑性がある。

長吉が明治以降本業とした後に、仙台での修行は前述の通り結果的に販路の確保と製造技術の向上という効果をもたらしたのではないか。これが結果的に文秀堂が最後まで筆屋として残った理由だと思われる。

明治期に廃業破綻した筆屋は、需要不足生産過剰になったときに解決の手段を持たなかったのだと思われる。

そして全盛期を迎える

水沢と岩谷堂は北限の筆生産地だった。江戸期、水沢岩谷堂は中央からみると、その辺境的な立地により大消費地から遠く離れた産地であった。当然これは産地として不利であった。

しかし維新後、北海道樺太に国策的企業の工場が数多く立地したとき、それが有利な点へと変わる。鉄道、製紙工場、発電所、製鉄所、炭鉱が建設された。19世紀から20世紀前半までは筆は実用的筆記用具で、事務作業にも必需であった。その必需品を求める極北に立地する企業にとって、最も近い調達地のひとつが水沢岩谷堂であった。家伝にも樺太の王子系三菱系の工場と取引があったと伝わっている。



昭和三十年代末頃 文秀堂中町支店 未治(大叔父)晶子(姉)竜太郎

水沢筆製造終幕 分業による工芸品生産

江戸時代の初頭、豊臣家の祐筆であった和久氏が伊達家に仕え、大阪より伊達領内に筆の製造技術が伝えられた。水沢、岩谷堂の筆製造は隆盛期を経て現在は完全に途絶え、地元ではその存在も忘れ去られている。他の工芸品が同じ道を辿らないことを願っている。

伝統的工芸品の製造は一軒だけでは難しい。ある程度の業者数により産地を形成することが必要だ。70軒余あった筆屋が文秀堂1軒になった時点で水沢筆の製造が終幕に向かい始めたといえる。

工芸品は分業により成り立っている場合が多い。材料の調達から各種加工までを一軒一人で行うことは難しい。

筆の分業

大まかに軸作りと穂先仕上に分かれる。穂先仕上は穂首作り・繰込・仕上・銘刻とに細かく分業化されている場合も多い。軸作り職人がいなくなると製造は難しくなる。逆に軸作り職人が存在するには何人かの仕上げ職人がいなくてはならない。筆需要が減少し廃業が増え、各分業職人が存続できる製造量を確保し難くなる中、文秀堂1軒になっては歴史に幕が引かれたのは必然である。

漆器の分業

木地職人と塗師がいる。木地職人は椀物と指物に別れ、塗師も場合により加飾を別とする。材木漆等の材料は、少ない需要では調達専門店は地元では成り立たない。秀衡塗の業者はまだ数軒あるが離れて立地しているの、産地の態をなしていない。

他の漆器は分業が成り立ち、産地を形成しているところが多い。その中で秀衡塗は、五十年以上前に漆器産地であった衣川増沢部落がダム工事により水底に沈み職人も離散したため、産地無き工芸品になった。木地他の調達は県内を始めとする他所に頼らざるをえない。

鉄器の分業

鉄瓶であれば本体を造る釜師と鉾師に分業される。種物といわれる細かい部材他を別の職人が分業している場合もある。製品により、着色職人等々にも分業される。また、鉄器職人は製造に徹している者も多く、分業として専ら販売を行う者もいる。

現在はある程度の工人職人がいるが、次代への不安を感じる人もいる。

多くの工芸品は江戸期まで、封建的領主の庇護を受けて存続していた。現在、その役目の一端は行政が担うべきである。封建的領主の庇護なき今、民衆的工芸品＝民芸品に変化し民衆の支持を得る工芸品、需要の変化に対応できる工芸品のみが継続できると考える。

高橋家 家族書

一年ほど前に、八代目となるべく高橋健太郎が入社しました。三年半前に挙式し、嫁と長孫を連れて帰郷しました。

この機会にお見知りおきいただき、お引き立ていただけますよう、お願い申し上げます。



高橋 竜太郎 後列右 昭和34年2月生・岩手県奥州市出身
特技・趣味 水泳(水球ゴールキーパー) 旅行(国土交通省旅行業務取扱管理者)
昭和56年 早稲田大学法学部卒
キヤノン販売株式会社(現キヤノンマーケティングジャパン株式会社)入社
昭和58年 文秀堂株式会社入社
平成12年 文秀堂株式会社 代表取締役就任

妻 綾 子 後列左 昭和36年1月生 福島市出身 旧姓本多
履 歴 学習院女子短大卒 キリンビール株式会社 文秀堂株式会社

長男

高橋 健太郎 前列左 昭和59年4月生 岩手県奥州市出身
特技・趣味 水泳 スノーボード 登山 キャンプ
平成19年 早稲田大学商学部卒
GEジャパン株式会社入社
平成23年 コニカミノルタビジネスソリューションズ株式会社入社
平成26年 文秀堂株式会社入社 現職常務執行役員

嫁 麻里子 前列右 昭和60年3月生 横浜市出身 旧姓武留井
履 歴 慶応義塾大学卒 C B R E ナイキジャパン 現職翻訳業

長孫 太智 前列中央 平成25年9月生 神奈川県横浜市出身

忘れられぬ激動の一年

平成二十三年

1月21日 創業195年式典

文秀堂では以前より5年に一度記念行事を行っています。平成二十三年は創業195年にあたり、恒例の行事並びに懇親会を行いました。

2月13日 長男婚約

長男健太郎が武留井麻里子と、文秀堂後継を前提としたうえで婚約。仙台秋保温泉・ホテル佐勘で、両家が顔合わせをしました。

3月11日 東日本大震災発生(世界銀行推計 世界史上1位経済損失)

午後2時46分 東日本大震災発生。津波による三陸海岸等の沿岸部と原子力発電所事故による福島県内の取引先の被害影響が甚大。当社も建物等の物的被害と、売上大幅減少の経済的影響がありました。

建物被害 大町社屋前部外壁全面破損落下により県道一部通行止

本社二階窓ガラス破損落下 通路敷石破損

社内パーティション変形破損 排水路変形

営業1部社屋内壁外壁天井破損 屋根材落下

店舗倉庫内鉄器・ガラス器・陶器破損多数

取引先被害 津波流出約50軒 死亡8軒 震災後一ヵ月売上84%減少
仕入先倉庫被災のため仕入れ困難となる。

福島得意先では原子力発電所事故とその風評の影響あり。

交通機関等 高速道路・鉄道不通、燃料入手不能。

出張中の役員が東京駅で被災。約3週間帰社できず。

4月から5月 安否確認と弔問を繰り返す

最初の被災地訪問は震災から一ヵ月後、我々夫婦と長男、その婚約者の四人で取引先の安否確認と弔問のため津波被災地を廻りました。ガレキだらけで、通行止めが多い道を進みました。待っていたのは目を疑う光景と、耳を疑うような話でした。

得意先文具店では、地震後駅前の店から高台の自宅へ祖母・社長夫婦・息子で避難した。その後、社長夫妻は店の戸締りに戻り、二十代の息子は消防団所属のため交通整理に向かった。後日三人とも遺体で発見され、生き残ったのは祖母。発見されても火葬の場所も無いのが現実。

得意先旅館では客を避難させた後、残った社長が行方不明。女将は死亡。その他にも……

その後も何度も津波被災地を廻りました。文秀堂の継続は難しいかもしれないと考える日々でした。本当に復興ができるのだろうかと思う日々でした。息子に文秀堂後継させていいのか悩みました。

6月26日 平泉が世界遺産に登録決定

ユネスコ世界遺産委員会がパリで開催。

「平泉 仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の審査が行われ、世界遺産登録が決定しました。

登録直後から、平泉地区の売上が急増しました。他の落ち込みを平泉だけで補填できませんでしたが、大きな力となりました。

7月31日 タイ洪水発生(世界銀行推計 世界史上4位経済損失)

当社仕入先を含む多数の日本企業の工場が被災しました。一部仕入れが不能または遅延となり、納品ができずに売上が減少しました。その後3ヶ月以上の長期にわたりました。

8月1日 長男後継を決め転職

5月から、震災による経営悪化や世界遺産登録決定した場合の業績好転見込を踏まえて、長男と話し合いを重ねていました。長男の後継の意向を確認し、あわせて翌年春の挙式を決めました。

長男後継決定後、急遽コニカミノルタに修行のための入社を要請し、この日入社しました。



後藤新平ゆかりの言葉 文秀堂所蔵品 筆者不明

福島いわきと岩谷堂を繋ぐ縁し



高橋健太郎 高橋竜太郎 岩城光英氏 小野寺出秘書

岩城参議院議員(法務大臣)事務所訪問

福島いわき市出身の岩城議員とお会いした。私の大学の先輩であり、旧岩谷堂城下・江刺区出身の小野寺氏仲介による。旧知の小野寺氏は岩城議員政策秘書であり、私の妻の実家が選挙区福島という繋がりもある。

奥州藤原氏初代清衡の娘徳姫と岩城家祖則道。岩城家久保姫と伊達宗家。岩谷堂岩城家と高橋家。岩城議員・小野寺秘書と私・妻。いわきと岩谷堂を結ぶ幾重もの縁しに、運命を感じる出会いであった。岩城議員は温厚で包容力ある紳士、そして福島・東北の震災復興を強く推し進める手腕を持つ政治家という印象であった。



岩城氏統治時代の平城本丸跡(飯野平城・福島県いわき市)
開けて眺望の良い北側 木が生い茂る南側

いわき紀行・岩城一族の故郷を訪ねて 高橋家の出自は？

福島県いわき市には二つの平城跡たいらがある。ひとつは磐城平城跡。磐城平城は平と内郷に跨る高台の東端に1603年鳥居氏が築城した。いわき駅に隣接する城跡は、掘割と石垣が残り市指定遺跡となっている。

もうひとつは同じ敷地の西端にある岩城氏居城であった飯野平城跡。所領没収のため1602年廃城となった。岩城氏ゆかりの飯野平城跡は城跡を示す石碑がある他は、当時を偲ぶ物は無く荒城という印象である。市民の認知度は高く無く、観光客が訪れることも殆んど無いようだ。

城の敷地は、大正期に国道と鉄道を通すために、十分な発掘調査なしに削られたようだ。その為、飯野平城の本丸付近だけが、切り取られて隔離された感がある。

岩城家祖の正室である奥州藤原清衡の娘徳姫が平泉に倣い築かせた白水阿弥陀堂。城からは約4キロ離れている。城の地は平、白水は泉という字を上下に分けたもので、合わせて徳姫の故郷平泉に由来するという説が地元にある。また、いわき市小名浜近くに泉という地名もある。

阿弥陀堂付近いわき総合高校隣接地の2箇所を含め、高橋という地名がいくつかあった。岩城家ゆかりの地ではあるが、当家の出自との関連を確認する術は当然無い。

幾度見ても、国宝・白水阿弥陀堂はその姿だけでなく、周囲の風景を含めて見事である。





享保十一年 江刺郡岩谷堂要害屋敷普請奉願地図



岩谷堂城土塁 本丸(右)中の曲輪(左)間の切り通し

営業案内



文秀堂株式会社

岩手県奥州市水沢区久田 2 2 - 3

TEL 0 1 9 7 - 2 3 - 4 1 6 5

FAX 0 1 9 7 - 2 3 - 4 1 6 7

南部文秀堂・営業 1 部

TEL 0 1 9 7 - 2 3 - 4 1 6 5

吉小路店文具館・営業 2 部

TEL 0 1 9 7 - 2 3 - 4 1 7 0

吉小路店クラフト館

TEL 0 1 9 7 - 2 3 - 4 1 7 4

Z プラザ店(水沢区西町 1 - 1)

TEL 0 1 9 7 - 2 2 - 7 8 0 0

北日本商事株式会社

岩手県奥州市水沢区久田 2 2 - 3

TEL 0 1 9 7 - 2 4 - 9 4 7 6

岩手県奥州市は平泉の北隣に位置し、奥州藤原氏初代清衡の出生地であり、藤原氏の館があった場所です。

藤原氏は平泉に館を移しましたが、藤原氏を起源とする南部鉄器・秀衡塗・岩谷堂筆筒は現在でも市内で生産されています。また、江戸時代には仙台の伊達本家に倣い、水沢城主留守氏(水沢伊達家)と岩谷堂城主岩城氏(岩谷堂伊達家)が奨励し庇護した筆を始めとする工芸品銘産品があります。

当社は奥州市水沢区において文化十四年(1817年)に創業しました。明治期は市内特産品である水沢筆と南部鉄器の製造卸を主力としていました。

南部鉄器を起源とする営業第一部は、現在でも南部鉄器を主力商品とし、秀衡塗・正法寺椀・その他県内工芸品、観光施設向け業務用品等を販売しております。

筆を起源とする営業第二部は、筆の他には硯、半紙等の書道用品や算盤を販売しておりました。筆の製造卸を続けながら、時代の推移とともに筆記具・電卓等に、そして現在はオフィス用家具事務用品の販売とMFP複合機・パソコン・プリンタをはじめとするOA情報機器の販売メンテナンスへとその主力商品を変化させています。

上記のように取扱品は、家具・寝具・食器・什器から情報機器・事務機械まで多岐にわたります。官庁企業・観光施設・ホテルレストラン等における需要に幅広く対応しております。

会社情報

社歴

文化十四年(1817) 創業

嘉永六年(1853) 設立

昭和二十五年(1950) 法人に改組 有限会社高橋文秀堂とする

昭和四十五年(1970) 株式会社に改組 文秀堂株式会社とする

昭和五十年(1975) 北日本商事株式会社設立

平成二十八年(2016) 創業二百年

役員

代表取締役 高橋竜太郎
取締役 高橋綾子
取締役 鈴木敦
常務執行役員 高橋健太郎
監査役 高橋衣子

資本金

1 5 0 0 万円

取引金融機関

北日本銀行水沢支店 水沢信用金庫本店
岩手銀行水沢支店 東北銀行水沢支店 日本政策金融公庫

部門別 主要取扱品目

南部文秀堂・営業1部

南部鉄器・秀衡塗・正法寺椀
水沢筆・岩谷堂筆筒・浄法寺塗
裂織・型染・漆器・民窯他工芸品・郷土玩具他売店商品
業務用家具・寝具・食器
厨房用品・浴場用品・消耗品・他業務用品

営業2部・吉小路店文具館

複合機(MFP=Multifunction Printer)
複写機・ファクシミリ・プリンタ・パソコン
自動販売機・レジスター・タイムレコーダ
情報OA機器販売・メンテナンス
スチール家具・木製家具・文具事務用品
コニカミノルタ サービスステーション
キヤノン サービスステーション

吉小路店クラフト館

南部鉄器・秀衡塗・浄法寺塗・正法寺椀
諸国民芸品・贈答品・土産品
水沢筆・硯・書道用品
茶道用品・和紙・香
掛川深蒸し茶・仙北角館樺細工・多治見美濃焼

Zプラザ店

南部鉄器・奥州市内工芸品・奥州市内食品
岩手県内工芸品・岩手県内食品
南部煎餅・麺類・菓子・漬物・土産品
掛川深蒸し茶

奥州市観光物産協会運営施設
みずさわ観光物産センターZプラザアテルイ内店舗

主な仕入先

南部鉄器伝統工芸士
秀衡塗卓越技能士, 伝統工芸士
コニカミノルタ・キヤノン
京セラ三田・東芝テック・アマノ
東京エコール・コクヨ・ライオン事務器
シャチハタ・オカムラ・パイロット
光製作所・東北寝装・溝端紙工
資生堂・ニチネン・ニイタカ・上山製紙
八幡平市安比塗漆器工房・日本香堂
有田・瀬戸・美濃・九谷・他県内外和陶器産地
浄法寺・会津・木曾・川連・津軽・県内外漆器産地
掛川市農業協同組合
岩谷堂筆筒・岩手県産・岩手繊維
只勝市兵衛本店・小山製麺・こがね
小松製菓・羽沢製菓・回進堂・さいとう製菓
日本たばこ・たばこ販売協同組合

主な販売先

百貨店

阪急百貨店・高島屋・東急百貨店・三越
小田急百貨店・東武百貨店・西武百貨店・そごう・丸広百貨店

温泉旅館・リゾートホテル・シティホテル

青森県 十和田荘・十和田湖レークサイドホテル・八甲田ホテル
酢ヶ湯温泉・五戸まきば温泉・白山閣・海扇閣・南風館
岩手県 ホテル羅賀荘・ホテル大観・ホテル紫苑・ホテルはまぎく
志戸平温泉・ホテル福富・ホテル椿・田老観光ホテル
グリーンヒルおおの・浄土ヶ浜パークホテル・祭時温泉
プラザイン水沢・水沢サンパレスホテル・グリーンテージ
薬師堂温泉・水沢グランドホテル・ホテルニュー江刺
盛岡グランドホテル・ひめかゆ・さくらの湯・大沢温泉旅館
サンホテル衣川荘・マリンサイドスパたねいち・えぼし荘
秋田県 後生掛温泉・須川高原温泉・ホテル鹿角・龍門亭千葉旅館
宮城県 ホテル佐勘・鳴子ホテル・ホテル新富・ホテルニュー水戸屋
ホテル大観荘・ニュー泊崎荘・みちのく庵・ホテル絶景の館
山形県 ホテル古窯・旅館元河原湯・能登屋旅館・ヴァルトベルク
東屋旅館・河鹿荘・堺屋旅館・村井旅館・中野屋別館不動閣
福島県 丸峰観光ホテル・芦ノ牧ホテル・万葉亭・のんびり温泉
ホテル光雲閣・田村屋旅館・ホテル五色荘・のんびり館

レストハウス・レストラン・飲食施設・売店

平泉レストハウス・げいびレストハウス・牛の里
えさし藤原の郷・遠野ふるさと村・リサーチ四季の抄
岩泉産業開発・観光物産館ぱあぷる・滝観洞
八食センター・田沢湖共栄パレス・大船渡屋形船潮騒
東北ニュージールランド村・松島蒲鉾・青葉城本丸会館
那須みちのく・那須瑞穂蔵・赤城高原牧場
岩手県産ららいわて盛岡店・ららいわて平泉店
ジャスター・宮沢商店花巻空港売店・県内道の駅
掛川市=これっしか処・サンサンファーム・大東温泉

神社仏閣

正法寺・大林寺・瑞巖寺・鳳凰寺
日高神社・駒形神社・梨郷神社・柳津虚空蔵尊

官庁・企業

岩手県・奥州市役所・近隣市町村役場・行政事務組合
岩手南部森林管理所・国立天文台
消防署・福祉協議会・体育協会・交通安全協会
奥州商工会議所・奥州市観光物産協会・まちづくり奥州
奥州市文化会館Zホール・奥州市総合体育館Zアリーナ
奥州市立図書館・みずさわ観光物産センターZプラザアテルイ
斉藤実記念館・後藤新平記念館・えさし郷土文化館
江刺農業協同組合・岩手ふるさと農業協同組合
水沢第一高等学校・公立小中高校
岩手県産・岩手繊維・胆江日日新聞・水沢テレビ
北日本銀行・水沢信用金庫
水沢病院・奥州病院・胆沢病院・綾野歯科医院
福寿荘・寿水荘・協同光陽会・幸生会・友愛園
トヨペット・日産プリンス・東京自動車・オートバックス水沢店花巻店
アスク・関東商事・水沢ガス・北日本都市交通
掛川市役所・掛川市農業協同組合

関連会社

北日本商事株式会社

昭和五十年五月設立

代表取締役 高橋竜太郎

資本金 1000万円

岩手県奥州市水沢区久田2番地3 Tel0197-24-9476

取扱品目

岩手県産食品(南部煎餅・麺・漬物・菓子)土産品
厨房用品・浴場用品・消耗品・他業務用品

取引金融機関

北日本銀行水沢支店 水沢信用金庫本店 岩手銀行水沢支店

**The story of 200 years
Bunshudo and Meikodo
The Takahashis and The Kumadas
200 years of two norens and two families**



**Samurai helmet of the Dates who was a feudal lord
The Nanbu-ironware made in Mizusawa**

President of Bunshudo Inc.

Ryutaro Takahashi

22-3, Kyuden,Mizusawa,Oshu,Iwate,Japan

The Edo Period

About 350 years ago, a lot of samurai in Mizusawa-ward, Oshu, Iwate were making writing brushes on the side. Sokichi Kumada, the founder of Bunshudo started writing brush making in 1817. This is mentioned in the research data of Bunshudo by Tokyo Shoko Research, the credit survey company of Japan. There were also many samurai making writing brushes in the neighboring Esashi-ward. Chokichi Takahashi of Meikodo was one of them in the last years of the Edo period. There is no document that shows whether the father or the grand father of Chokichi was already in the business.

The Meiji Era

In early years of the Meiji era, there were 57 writing brush craftsmen and about ten brush production and wholesaling companies which employed the craftsmen in Oshu City. With the end of Edo period, the old class system was abolished and Chokichi was no longer samurai. Writing brush production and wholesaling became his main business and he employed four craftsmen in 1888. During the Edo period, he was selling brushes only at Oshu City and nearby area, but the business expanded to the entire Tohoku (Northern part of Japan) district and Hokkaido (The island at the North of Japan) in the Meiji era. The company was in its heyday. As pen and pencils became more common, the sales of writing brush decreased. While other craftsmen and companies close their business, Meikodo of Takahashi merged with Bunshudo of Kumada and started joint operation in the name of Bunshudo

		Bunshudo	Meikodo
Takahashi Shogunato Edo Period - 1868	Bunka	The Kumada	The Takahashi
	Bunsei		Choziro
	Tenpo	Sokichi	
	Kouka		
	Kaei		Miyasaburo
	Ansei	Seiji	
	Man-ei		
	Bunkyu		
	Genji		Chokichi
Meiji 1868-1912		Tsunenoshin	
		Yutaka	Baikichi
Taisho 1912-1926		Baikichi	Yokichi
Showa 1926-1989		Kichiro	
		Ryutaro	
Heisei 1989-Now		Kentaro	
		Taichi	



The Taisho Era

In the Taisho era, the number of writing brush manufacturers decreased even further and there were only 12 craftsmen and 2 production and wholesaling companies left in Mizusawa-ward. Yutaka Kumada, the fourth president of Bunshudo, got retired and Baikichi Takahashi became the fifth generation owner. Bunshudo started the sales of another local specialty, Nanbu-ironware, in addition to writing brushes.

The Showa Era

In the middle of the Showa era, Bunshudo made a product planning of “Hidehira-nuri” (lacquer ware) and manufactured the products under its own brand name. Hidehira-nuri became another leading product of Bunshudo together with Nanbu-ironware.

Bunshudo was now the only writing brush production and wholesaling company in the area. On the other hand, the demand for writing brushes and abacus, which used to be the main product, decreased furthermore, and office and stationery supplies and electronic calculator took its place. Then, the sales and maintenance of MFP printers and sales of office furniture became the main business. The sales of writing brushes and ironware used to be in the same craft sales department in earlier years, but now it was divided into the office equipment sales department and the craft sales department.

The Heisei Era

Now, the craft sales department also sells equipment for business such as wooden furniture, tableware and bedding besides traditional crafts. While continuing the sales of office furniture and supplies, the main business of the office equipment sales department became the distribution and maintenance of OA appliances of major manufacturers such as Canon and Konica Minolta. Bunshudo has now three retail stores. The craft shop in Kichikoji which sells traditional craft products and gift items, the stationery shop which sells office and stationery supplies at Kichikoji, and the Z-plaza shop which sells souvenirs mainly.



Hidehira-nuri

2011 Great East Japan Earthquake and Tsunami

The Earthquake occurred at 2:46 in the afternoon of March 11 in 2011, the year Bunshudo marked the 195th year in business. The office building was damaged by the earthquake, and the tsunami and the nuclear power plant accident had a large impact on our main business area, the Sanriku Coastal Area and Fukushima Prefecture. About 50 of our customers had their office swept away, and eight of them lost their members. Everything stopped. We could hardly collect receivables. The risk of bankruptcy continued since the earthquake. The one of the reason why Bunshudo could avoid the bankruptcy was the world heritage registration of Hiraizumi area.

Bunshudo's 200th year in business

During these 200 years, Bunshudo went through several times of crisis. At the beginning of the Meiji era, when the Tokugawa Shogunate fell, and samurai class was abolished, in the Taisho era, when the most of the writing brush suppliers went bankruptcy and closed their business, right after the World War II, when our house and company building were burnt down, when the bubble economy collapsed in early 1990s, and the Great East Japan Earthquake. But each time, we did survive.

In Takahashi family, there is a saying “Sell commodities of inside outside and commodities of outside inside.” With this being our principle, we sell local crafts of Iwate Prefecture, Nanbu-ironware and Hidehira-nuri (lacquer ware) at outside of Iwate or outside Japan, and we sell office equipment and OA appliances manufactured at outside of Iwate or abroad at Iwate. And now Bunshudo marks its 200th years in business.

But the crisis we had last is not the last one. Hard times will come again. But we will get over the next crisis and our business continues to another 100th year, to the next generation.



震災後の掛川市と物産交流関連記事

2011年(平成23年)5月20日(金曜日)

岩手日報



南部鉄瓶を手にする高橋電大部長。掛川市での物産展の成果が期待される

姉妹都市に特産品PR 物産協会 掛川(静)で販売へ

27日から

奥州市物産協会(会長 佐々木隆男)は、震災で特産品の売上に影響が出たことを受け、27日から、掛川市で物産展を開催する。掛川市は奥州市の姉妹都市で、物産交流が盛んに行われている。掛川市物産協会(会長 佐々木隆男)は、震災で特産品の売上に影響が出たことを受け、27日から、掛川市で物産展を開催する。掛川市は奥州市の姉妹都市で、物産交流が盛んに行われている。

掛川市物産協会(会長 佐々木隆男)は、震災で特産品の売上に影響が出たことを受け、27日から、掛川市で物産展を開催する。掛川市は奥州市の姉妹都市で、物産交流が盛んに行われている。掛川市物産協会(会長 佐々木隆男)は、震災で特産品の売上に影響が出たことを受け、27日から、掛川市で物産展を開催する。掛川市は奥州市の姉妹都市で、物産交流が盛んに行われている。

平成23年(2011)6月2日(水曜日)

岩手日報

姉妹都市が奥州支援 物産協会で 収益の一部寄付

奥州市物産協会(会長 佐々木隆男)は、震災で特産品の売上に影響が出たことを受け、27日から、掛川市で物産展を開催する。掛川市は奥州市の姉妹都市で、物産交流が盛んに行われている。掛川市物産協会(会長 佐々木隆男)は、震災で特産品の売上に影響が出たことを受け、27日から、掛川市で物産展を開催する。掛川市は奥州市の姉妹都市で、物産交流が盛んに行われている。



小沢市長(右)に奥州市物産協会の様子を紹介する高橋社長(中央)

2011年(平成23年)5月27日(金曜日)

東日本大震災被災地へ 奥州市物産展

奥州市物産協会(会長 佐々木隆男)は、震災で特産品の売上に影響が出たことを受け、27日から、掛川市で物産展を開催する。掛川市は奥州市の姉妹都市で、物産交流が盛んに行われている。掛川市物産協会(会長 佐々木隆男)は、震災で特産品の売上に影響が出たことを受け、27日から、掛川市で物産展を開催する。掛川市は奥州市の姉妹都市で、物産交流が盛んに行われている。



祈 東 日 本 大 震 災 復 興

祈 音 色 で 涼 み 省 エ 節 電

復興風鈴 姉妹都市 奥州市物産協会

奥州市・掛川市オリジナル

2012年(平成24年)6月9日(日)

震災を機に活発化

「互恵互済 販路定着に期待」

奥州市物産協会(会長 佐々木隆男)は、震災で特産品の売上に影響が出たことを受け、27日から、掛川市で物産展を開催する。掛川市は奥州市の姉妹都市で、物産交流が盛んに行われている。掛川市物産協会(会長 佐々木隆男)は、震災で特産品の売上に影響が出たことを受け、27日から、掛川市で物産展を開催する。掛川市は奥州市の姉妹都市で、物産交流が盛んに行われている。

2012年(平成24年)6月9日(日)

後継継平、椎名親子と台湾

高橋 竜太郎 (本誌既入)

「後継継平、椎名親子と台湾」

高橋 竜太郎 (本誌既入)

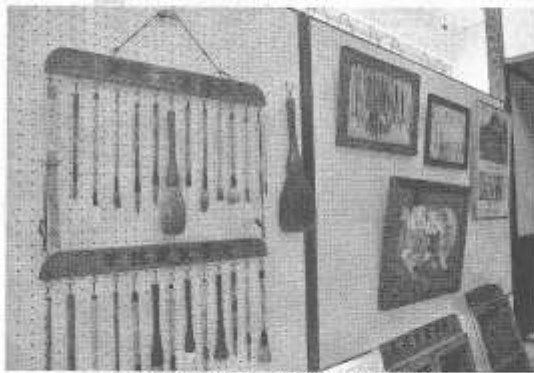
NHK総合テレビ 水沢筆と南部鉄器の紹介
 平成27年6月25日「ひるはび」 6月27日「おはよう日本」



時節の風景

地域雑観

(論説主幹兼文化部長 小野寺和人)



さまざまな筆や器、観が展示されている「水沢筆の歴史展」

水沢筆、用途変え今なお

戦後、文具業界閉店や縮小などに取って代わられ、書用品としての価値の減が失われた「水沢筆」平成に入り、最後の筆職人が亡くなり、当地域の筆づくりは絶えてきたものの、毛筆の産地として知られる弘島・具の筆者に筆を造り出すなどし、今も水沢筆の伝統が守られている。

日毛毛筆種といふ。四村の記録によると、創業は1877年。留守客家の熊田家が筆づくりの伝統を継いでいたことで、大正期に熊田家と熊田家匠・熊田家の一筋、熊田家が合併し、現在に至る。もともと、熊田村・伊保藩が

字間と船室の両面から筆づくりを奨励したこと始まる。仙台開府後、大蔵から名筆を呼び寄せ、筆職人を育成したことでも藩内に普及したらしい。熊田を助けたのは、新政府の財政難があった。明治維新にた武士が多かたのかかろかなる。

企画展では、水沢筆と呼ばれる同様の筆が大小約5と約100本が展示されている。筆は書風を捉え、活字に仿して、大小、長短、筆先を使い分けるとい、種類は豊富だ。

そんな水沢筆の歴史を語る企画展が、本宮図書館の郷土交流館で開かれていた。かつて、水沢筆の製造・販売を担った文書堂(高橋軍太郎代表取締役)・水沢文田が、栗生創業200年を記念して先立ち、地域の伝統文化を多岐にわたる歴史を知ってもらおうと、

筆の支払いを滞れば、士族の反感の恐れがあったため、税控を設け上するに始まる。筆を造る人が刷化された。刷化が進むにつれて、収入は十分でなく、内職によって生活資金を得る形もあつたようだが、

現在は、同村の筆生はほとんどいないものの、国指定伝統的工芸品「川尻筆」の産地として知られる弘島郡筆生の筆者に生産を委託している。趣味や高級品としての需要のため、年間1000~1500本を生産するほか、東北某県の寺院からかの引き合いもあるという。

熊田村で、創業から本業に切り替える武家増えたのだらう。同様に、義務教育普及をいえる学制公布で、書写の習字教育が教科に盛り込まれ、筆の需要が高まった。また、筆にかかわる業者が増えること、同業者間の交流も本村、文書が合併したのも大正末期だが、先述の仙台を通じて販路確保に努めた。明治政府の北海道開拓に伴う用品として筆の需要もあった。

熊田村から明治期にかけて筆づくりは、主に書用品としての需要だったが、時代が移り変わるとともに筆の用途が求められて、今も右伝統が守られている。

水沢筆製造として創業 南部鉄器も柱とし 事務機販売メンテナンスを併せ現在に

文秀堂株式会社 創業二百年

ごあいさつ

本年、創業二百年を迎えました。これも利益生産、社人共進、地域貢献の性質のおかげと感謝しております。誠にありがとうございます。
当社は水沢筆の製造業として創業しました。画においても主力である南部鉄器を始め、筆の製造業として、同じく主力の事務機の販売・メンテナンスは五十年前、筆の製造業を柱とし、近年筆の製造から産化した形で始まりました。
創業時に79軒あった筆業者は、当社1軒だけになりました。現在でも、少ない販売員ではありますが文秀堂の筆を販売しています。特に北無道を中心に販路を広げ伸ばした水沢筆の現状に大変感謝の意を感じつつ、後の伝統的な工芸品の承継・販売事業を軸としてやめません。
当社の産業である水沢筆と南部鉄器は、いずれも地元の伝統的な工芸品です。日目の事務用品でもあった筆の承継を引き継ぐ中野川品機械製造部門は、南部鉄器から誕生した工芸品や食品等の地元特産品部品を両輪として二百年を歩みます。

文秀堂株式会社
代表取締役 高橋 竜太郎
常務執行役員 高橋 隆太郎



時代	文秀堂	創業地
現代	高橋家	高橋家
文政	豊吉	高橋家
天保	豊吉	高橋家
弘化	豊吉	高橋家
嘉永	豊吉	高橋家
安政	豊吉	高橋家
万延	豊吉	高橋家
文久	豊吉	高橋家
文治	豊吉	高橋家
慶応	豊吉	高橋家
明治	豊吉	高橋家
大正	豊吉	高橋家
昭和	豊吉	高橋家
平成	豊吉	高橋家
令和	豊吉	高橋家

文秀堂 年譜

1864年 創業
創業地水沢町水沢の伊達家の長子とむね子に創業者となる高橋 豊吉 一門の筆道家・宮城家が家伝に製筆等の内職を営む
文秀堂元年(天保13年5817)
東京工科大学(前身)による創業
高橋家(水沢伊達町)家伝田舎 筆業を内職とする
岩崎家(岩手伊達町)家伝高橋家 種殖業・製筆業を行う
文秀堂17年(明治6年1883)
岩田アークバンク資料による創業
此頃 高橋家は仙台市若林区高橋町に事務所を移転し製筆業を本業化
文秀堂22年(明治10年1888)
高橋長吉 職人(名を継い)職を営む製筆道へと事業拡大
文秀堂29年(明治18年1895)
文秀堂 内閣監査院に於いて筆工職より職技を受ける
文秀堂107年(天正12年1927)
高橋長吉が引退し、高橋 豊吉と高橋 龍太郎が経営統合
文秀堂112年(昭和3年1928)
昭和天皇御大典(即位の礼、大嘗会)記念品として文秀堂から御用
文秀堂114年(昭和3年1938)
法人に組織 有限会社文秀堂とする
文秀堂122年(昭和28年1953)
自由社に加盟
文秀堂142年(昭和17年1954)
文秀堂が東北、北日本産業株式会社にて筆工職を受賞
文秀堂153年(昭和18年1964)
株式会社へ改称 文秀堂株式会社とする
文秀堂159年(昭和34年1970)
北日本商事株式会社設立
文秀堂163年(昭和38年1977)
キヤノン製品正規販売・認定保守サービス業務委託店
文秀堂168年(平成16年2004)
フニキエノカ印刷機修理部商店・認定サービス実施店
文秀堂195年(平成29年2017)
創業150年(平成29年) 家日本大祝賀生 平塚製菓産産産
文秀堂200年(平成28年2016)



文秀堂株式会社
南部文秀堂
宮城県仙台市水沢区久田2-2-3

営業1部・南澤文秀堂 0197-23-4165
南澤 アクションリ 0197-23-4167
営業2部・文具部 0197-23-4170
吉小路クラフト部 0197-23-4174
エプソラアパレル 0197-22-7000
北日本商事株式会社 0197-24-9476



コニカミノルタ事務情報機器販売店・認定サービス実施店
文秀堂株式会社創業200年をお慶び申し上げます
文秀堂株式会社創業200年をお慶び申し上げます

Canon キヤノンマーケティングジャパン株式会社
User-Centric

bizhub C368/C308

文秀堂 創業200年 KYOCERA 世界キヤノンソリューションズ

文具・事務機・OA機器 オフィスサプライ エコル流通グループ 株東京エコル	高岡銅器・鉄器 神仏具・仏花器 富山県高岡市 株秀正堂	ホテル用品取扱 総合商社 新潟県新潟市 株片山商事	南部製器 平太房	文秀堂筆製造元 株文志堂	静岡県 掛川市農業協同組合 株式会社 岩 鋳	資生堂アミニティグッズ株 有限会社 及春鋳造所
株 山 忠	株 水津屋本店	株 橋 市	株 文志堂	株 文志堂	有限会社 只野市兵衛本店	株式会社 小山製麺
株 同 進 堂	株 橋 市	株 橋 市	株 文志堂	株 文志堂	有限会社 羽沢製菓	南部せんべい乃爾手屋
中田産業株式会社	株式会社ニチネン	株式会社ニチネン	株式会社ニチネン	株式会社ニチネン	ブラザイン水沢	株式会社事務機商事
上山製菓株	丸宮鋳造所	岩手鋳器工芸株	金秀堂鋳造所	福井クラフト株	ホテルニュー江刺・Ease	株式会社ライオン事務器
サカモト商会	佐秋鋳造所	菓子工房アン	漆工房地神	ジョージ椅子製作所	岩手オフィス用品株式会社	株式会社はんこスーパー
株日本香堂	株東北製器リビング	東北カード株	アマノ株	株 藤岡の玉子	株式会社フェニックス	株式会社ニイタカ
弘前洋行製菓工業株	首段株	株水田鋳造所	庄日月芸	南部成徳堂	株式会社くろちく	岩 戸 鋳 工 場
					テクノハウスエイトピア	早稲田大学法学部民法研究會昭和36年卒有志
					株遠藤孝商店	株 藤 運 堂
					面管厚食品販売	株 アイセック早稲田大学委員会平成19年卒有志
					株 藤 谷 江 秀 堂	株 藤 谷 江 秀 堂
					株 藤 谷 江 秀 堂	株 藤 谷 江 秀 堂



文秀堂 二百年の物語

発行

平成28年2月吉日

文秀堂株式会社



文秀堂株式会社